

子供のころからアメリカは身近でした。父方の祖父母の家に行くとき、厚切りトーストにスクランブルエッグとジャガイモのソテーといったアメリカ料理が並びました。ときには厚いステーキを食べながら、アメリカで暮らしていたころの思い出話が延々と続きました。後に、大学で20世紀初頭の日米関係と移民問題に関する文献を読んだ時、かつて祖父母が移民だったことにすくには気づきませんでした。移民の暗いイメージと、陽気な祖父母の姿がどうしても結びつかなかったのです。

祖父は明治32（1899）年7月、横浜発のチャイナ丸でハワイへ渡航し、2、3年サトウキビ耕地で働いた後、本土へ転航しています。カリフォルニアの農場を転々とし、コロラド州では日本人労働者のための職業斡旋業

祖父母のアメリカ

もしていたようです。祖母は大正5（1916）年に祖父と結婚し、翌年、渡米しています。

2人の伯父はアメリカで生まれ、未っ子の父だけ日本生まれです。上の伯

村川 庸子



敬愛大国際学部教授

父は「一」、長男にはよくある名前ですが、ハジメという名前にジミーという英語の名前が織り込まれていたと知った時には驚きました。2番目の伯父はジョー。日本の領事館には「丈」と届けたのに誰かが書き足したとみえて「丈夫」になっていました。アメリカの市民権をもったジョー伯父さんは生まれた国との戦争で亡くなりました。

祖母はアリゾナで農業を営み「一里（マイル）真角の土地を借りて道で田の字に切り、真ん中に家を置いて」暮らしていたそうです。昼食の用意を始める前に外に出て、土埃が少し舞っている方に向かって鍋を打ち鳴らしておく、1時間後に祖父がトラクタで戻ってくる、その頃には食事の準備ができていた、と祖母は懐かしそうに語っていました。当時のアリゾナには外国人の農地取

移民暮らし懐かしく

得や借地を制限する土地法がありました。移民排斥のためのこの法律を祖母は知りませんでした。アメリカでは肥料を使わないで、3年くらいで近隣の肥沃な土地に移動する、家も移動可能で「モーブ（ムーブ）する」人が来て車に積んで次の場所に移してくれる、

と話していました。3年を超える借地は禁じられていたのですが、日本人はこの程度にしか感じていなかったのかもしれない。

ふるさと伝言

英語を話せなかった祖母ですが、黒人やメキシコ人の労働者と意思の疎通はできていたようです。「皆が恐れるけど、黒人はええよ。おとなしい。横着なのはメキシカンよ。おじいさんがおらんと皆、働かん。行って『アンダレ・トラバホエ（早く働け）』言うてやったら、『ムチマロエ』言うんぞな。『女のくせにいらんことを言うて』って怒るんよ。あっちの方が悪いのに」と笑っていました。「メキシコ人のおばあさんが『こちら辺はメキシコの土地じゃったのに、アメリカ人が来て取ってしまった』と言いよった。それで偉そうにしとったんじゃろなあ』などと話していました。

広大なアメリカ、白人や黒人、メキシカンなどの人々。祖父母が死ぬまで愛し続けた国でした。

（むらかわ・ようこ、今治市出身）